

インタビュアーあれこれ

教育委員会 貝沼康子

文化事業課で発行する「赤れんがから」の冒頭に、インタビュアーを載せ始めて二年近くなりです。そして、これまで十人近くの方に話を伺いました。

きっかけは、教育文化センターで行っている事業に、いろいろな方、それも有名人が出演したり、出展をされている、それを利用しない手はないと。はじめは、ちょっと気後れするところもありましたが、何とか一年だからと、頑張ることになりました。

事前準備として、まず最初は質問づくり。編集会議で検討します。そして、知人、友人でその方面に詳しい人からも集めます。

いざ、インタビュー。編集委員で、その方に会いたい人、直接話をしたい人、その分野が得

意な人がインタビュアーとなり。担当の特権として、もちろん私も出席します。

相手の方が本番後や本番の間といったときは、どうしても時間が短くなりがち。時間的には、一時間ぐらしかけると後でまとめやすいですね。

若い方だと、こちらも質問がしやすいし、興味のある人、よく知っている人がインタビュースると、相手側からの答に対して、さらに深く、また、思いがけないことも聞けます。

ピアニストの小川典子さん。本番前日のリハーサルの後でしたが、「明日のお昼は中華街に行くのが楽しみ」というお話を伺えて大変盛り上がりました。でも、時には、まとはずれな質問が多くて、「こういう質問をしてほしいな」と注文を出されたこともあります。また、本当に小さいときからその道一筋という方は、言葉で表現するの

が難しいようで、ここはシロウトのインタビュアーの弱いとこそ、今一歩突っ込んでの質問ができないことがしばしばありました。

さて、この「調査季報」が出るころには、私が担当する最後の「赤れんがから」が発行され、私も無事に文化事業課を卒業します。思い返すと、インタビューもけっこうミーハー的な好奇心と、できあがった後の「やった」という思い込みで、二年続きました。

△あとがき▽

一九九〇年代に入り、二十一世紀まであと十年余りとなった。書店の店頭には、九〇年代はどうなるだろう式の本がやたら目につく。そして、このような本がよく売れているようである。未来は予測しがたく、それゆえ、それを知りたい欲求にわれわれを駆り立てる。とりわけ、最近の内外情勢の激変を見るにつけ、聞くにつけ、その気持ちは強まるばかりである。

二十一世紀といった長期的な予測はともかく、昨年来の米ソ

「赤れんがから」は平成二年度からは月刊になり、インタビューも続く予定です。今後ともよろしくご愛読下さい。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

の関係や東ヨーロッパの動きは、世界の耳目を集めているところであるが、これからどうなっていくのであろうか。言えることは、こうしたなかで、一それがどのようなものであるのか、思い描くことはなかなかむずかしいが、これまでの東西関係とは異なる新しい世界秩序が形成されていくことになるだろう、ということである。

時代の曲がり角、とは月並で言い古された表現ではあるが、真実、今やその時期に来ているのかもしれない。

さて、最近の横浜を取り巻く内外の環境の変化を受けて、さきに、「よこはま21世紀プラン」の見直しが行われたところであるが、都市横浜を考えると、き、どう考えても、東京との関係を抜きにしては語れないし、とらえられなくなっている。

東京への諸機能の過度の集中と分散の問題、東京湾ウォーターフロント全体の中での横浜臨海部の位置づけや京浜工業地帯の動向、そして地価高騰を背景とした住宅の問題、市民生活、大都市行政のあり方……、本号では、東京圏の中でいまだどのような動きがあり、何が課題となっているのか、こうした東京圏の動向をにらみながら、横浜の置かれている状況をさまざまな角度から考えてみた。

二月十五日、三期十二年近くその職にあった細郷道一市長が亡くなった。謹しんで冥福をお祈りいたします。

この四月からは、新しい市長を迎えて横浜号は船出することになります。

△小林▽